

「桃の花咲く古河」の下見に!

●古河のまちを歩く・その1!

3月30日(日)は、昨年4月の川越に続いて沿線地域同窓会で行く小旅行第2弾の「桃の花咲く古河を味わう」です。そこで、16日(日)に妻と下見に行ってきました。

同窓会の皆様には、企画書の中で今回の旅の楽しみは3つとお伝えしています。一つ目は、桃の花が満開の



「古河総合公園・桃まつり」を散策します【写真①】。



二つ目が、古河の歴史と文化を感じさせる「古河歴史博物館」【写真②】、「鷹見泉石記念館」【写真③】、

「古河文学館」【写真④】、「篆刻美術館」【写真⑤】、「街角美術館」【写真⑥】、「永井路子旧宅」【写真⑦】など



の散策です。



三つ目が、古河麗和会、久喜麗和会、春日部地区浦高会の会員での昼食懇親会です。会

場は古河麗和会の皆様にお借りしております。お酒も少々ですが…。

* *

さて、そんな小旅行を愉しんでい



ただくためには、時間管理が大切です。そこで当日の予定通りに…。朝8時、春日部駅東口を車でスタート、中型バスのコースを抜けて、和戸から久喜駅東口に寄りました。



ただくためには、時間管理が大切です。そこで当日の予定通りに…。朝8時、春日部駅東口を車でスタート、中型バスのコースを抜けて、和戸から久喜駅東口に寄りました。



8時40分に久喜駅東口をリスタートして、9時20分に古河総合公園に到着しました。

【今回の写真は古

河市観光協会の「こがナビ」より引用】

* *

◆古河総合公園



設計監修は景観学者の中村良夫(東京工業大学名誉教授)。市民が集う現在の入会地・コモンズとして、また、「人間の歴史と自然の変遷がない交ぜになった有為転変の風景」を意識して、設計されている。中村はさらに、「パークマスター」制度を提案し、公園の維持管理だけでなく、イベントを企画・実施して、公園の顔となる役割を担うものとした。面積は22.4ha(未整備部分を含めた計画面積は25.2ha)。公園内には、古河公方足利氏の御所跡(古河公方館跡)、徳源院跡、御所沼、民家園(旧飛田家住宅・旧中山家住宅)、芝生の広場(御所沼原等)、遊具広場、大賀ハスの蓮池、約2000本の花桃が植えられた桃林等がある。この桃林は、江戸時代に藩主土井利勝が桃の植樹を推奨したことに始まる「古河桃園」を再現したもので、現在も毎年3月下旬から4月上旬にかけて「古河桃まつり」が開催されて、多数の観光客が訪れる。【ウィキペディア・フリー百科事典】

* *

ここは約1時間の散策を予定していますが、見所

満載です。まずは、2000本の花桃を楽しんでいただきましょう。16日は蕾が固い状態でしたが、20日から「桃まつり」も開催されるようで楽しみですね。



古河市と桃の関係は、江戸時代初期に古河藩主・**土井利勝**（1573-1644年、徳川幕府老中・大老）が江戸で家臣の子供たちに拾い集めさせた桃の種を古河に送り、農民に育てさせたのが始まりです。領地では燃料となる薪が乏しかったことから成長が早い上、果実は食料になる桃が選ばれたそうで、現在の桃は古河市が古河総合公園開園を機に、花を觀賞するための桃を植えて桃林を復活させたそうです。



* *

◆古河公方館跡



古河地方は、鎌倉時代、源頼朝の家臣、下河辺氏がこの地を支配し、幕府の北の守りとして軍事上政治

上にも重要な地点として栄えてきました。やがて室町幕府の時代となり、足利尊氏(たかうじ)の子基氏(もとうじ)が関東かんれい管領(鎌倉公方(くぼう))となって、関東を支配していましたが将軍家との折り合いが悪くなり、四代持氏(もちうじ)が永享の乱で将軍義政と争い、一度敗れたが許され、その子成氏(しげうじ)が再び管領となったものの、執事上杉憲忠と対立、追われて1455年に鎌倉から古河に居城し、古河公方と称しました。結城・佐竹氏を始め関東の豪族の支持を受けたので、形勢は一変、古河は関東の政治文化の中心地となり、古河公方時代が5代128年にわたって続きました。歴代の公方達は、古河に鎌倉文化を移入しました。その規模は鎌倉には及ばなかったが、古河の文化も大いに進み、文化人も数多く集まり、中でも医聖と呼ばれた医師田代三喜や当代一の連歌師と言われた猪苗代兼裁などは、この地に文化興隆をもたらした功労者と言えます。

* *

◆御所沼

古河公方御所(古河公方館)のまわりにあることから、御所沼と呼ばれています。地元の伝説では、利根川が氾濫しかけたとき、かんどりさま(香取神社の祭神)が大男のダイダラボッチを呼び出し、洪水を押し戻してもらったが、そのときダイダラボッチが踏ん張ったときの足跡の一つが御所沼になったとされています。

* *

◆徳源院跡(古河公方足利義氏墓所)

時代も干余曲折を経て、戦国の世に入り、関東も戦乱に明け暮れ、5代義氏の代になると、後盾となっていた北条氏も秀吉に亡ぼされ、公方の名を僅かながら、保ち得た状況となってしまいました。1582年、義氏が歿すると、男の嗣子がないために、一世紀を越えた古河公方時代も、5代をもって終わりを告げたのであります。



義氏には、女子一人が在り、これを氏女(うじひめ)と言いました。氏女は鴻巣の公方館に居を置いていましたが、秀吉は、公方の名跡の絶えるのを惜しみ、小弓義明の孫國朝に氏女を娶らせ、喜連川の地五千石を給し、その再興をはからせました。國朝の病死により、秀吉の命で弟頼氏に氏女を配し、氏女は、義親を生みました。公方の血統は斯くして喜連川家に継がれていきました。今、鴻巣公方館跡の辺りは、古河総合公園として残され、昔の面影を僅かに留める自然公園として賑わいを見せています。

* *

◆土井利勝

家康が江戸幕府を開き、天下の政治をとるようになると、古河は奥州街道筋と水路の要地となり、北の守りとして重要な位置を占めるようになりました。そのため、古河藩主には有力な譜代大名が配置されました。幕末までに11家12回の交替がありましたが、皆徳川家と深い関係のある譜代大名で、幕府の官僚に列し、大老や老中、大阪城代などの重職に就任したものが大勢います。中でも土井家は、2期12代わたり、古河城主として城下の発展に寄与し、古河の繁栄の基を築きました。

特に、利勝は、・土井の殿様、一六萬石よ・と甚句にも歌われている程、歴代城主の中でも最高の禄高で、三階櫓などを築いて古河城を最大に拡張し、幕閣最高の大老職まで勤め、徳川三百年の確固たる基礎を築いた智臣として、歴史上の有名な人物でもあります。【文と写真は「こがナビ・古河の偉人」より】

* *

公園一つにしても、これだけの歴史の足跡を残しているのです。いや～、歴史を大切に作る街は素晴らしいですね。古河にはこれまで3回訪れ、前回は07年3月17日に「日光街道の旅」の途中で古河総合公園や古河宿に寄ったのですが、その時には、ここまで歴史を勉強してきませんでした。今回は、しっかりと勉強して…。